

保育科専攻の学生における保育の「ふり返し」に関する研究

—保育実習前後の比較を通して—

飯野祐樹¹ 七木田敦²

The Study about “reflection” of the childcare in the student for the childcare : Comparison post and pre-training in childcare practicum

Yuki Iino¹ and Atsushi Nanakida²

This study clarifies “change of the philosophy to childcare” and “consciousness to reflection” for students in childcare practicum to become care-provider. In addition, this study clarifies the actual situation of “reflection” done during practicum. About the investigation method, I carried out questionnaire survey of the childcare practicum front and back twice for first grader students, second grader students, and fourth grader students who majored in childcare and analyzed it.

As a result of investigation, change of the consciousness for the childcare was seen in most students through childcare practicum. Furthermore, the fact that quantity about the change of the philosophy to childcare was different by a school year was shown in this investigation.

Key Words : reflection, childcare practicum, questionnaire

1. 目的

近年、わが国の保育を取り巻く環境は大きく変容し、幼稚園・保育所において中心的役割を担っている保育者には従来以上の資質の向上が求められている。「保育者の資質」と一口に言っても、その内実について共通理解を得ることは難しい。なぜなら、保育者に求められる資質は年々多様化し続けており、「保育者の資質」とはそれらすべての総体として扱われているからである。また、保育者には幼児との関わりに加え、近年では、育児支援、幼稚園と保育所との相互交流、特別な配慮を必要とする幼児への対応、そして、小学校との連携というように活動の幅に広がりが見られる。このように、今日、保育者には様々な状況に応じて適切な対応が求められ、従来以上に資質の向上が求められているという現状がある。

このような現状に伴い、保育者養成校においても従来以上に課せられる役割は多様化し続け、様々な講座が開設さ

れている。中でも保育実習は、学生個々がそれまでに学校で修得した専門的知識や保育技術を再確認する機会であり、保育観を再構築する機会でもある。このように、保育実習はそれまでに「机上の学」として培われた事柄について実践を通して理解を深め、現在持ち合わせている保育技術について認識する機会であると言える。また、保育実習中に自分の保育をとらえる機会の1つとなるのが保育実習中になされる「ふり返し」であり、学生は個々の実践における「ふり返し」を通してそれまでに修得した事柄についての確認を行っていることが推測される。では、保育実習を通して学生はどのような機会に自分の保育を「ふり返し」、個々の実践を認識しているのか。さらに、そこで得られた情報をふまえることで保育実習前後にどのような意識の変容が生起するのか。

近年、保育実習の前後において学生に生起する意識の変容を分析した研究としては、学生の職業観に保育実習が与える影響を分析した研究(松永ら, 2002; 伊藤, 2006) 保育実習前後で生起する学生の子ども観の変容を扱った研究(戸田ら, 2000; 権藤ら, 1998)、そして、幼児理解の変容を

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

扱った研究(武石,2000)、が挙げられる。このように、近年、学生の保育実習前後における意識の変容を扱った先行研究の多くは、保育実習前後における幼児のとらえ方の変容を中心に焦点が当てられている傾向がうかがえる。しかし、これらの先行研究では、「幼児のとらえかた」というように、事前に分析項目を設定しているということもあり、保育実習を通してどのような点で学生の意識に変容が生じたのかというように広い視点からは十分な分析がなされていない。また、学生における保育実習中の「ふり返し」に焦点を当てた先行研究は見られなかったが、学生が作成した保育日誌・保育記録の分析(例えば、生田目,1973;小山,2007)はこれに類似する先行研究であると考えられる。しかし、これらの先行研究は、調査者によって学生が作成した保育日誌を分析するという形態にとられており、学生から得られる情報を基に、どのようなときに「ふり返し」が生起するのかというように、保育実習中における「ふり返し」の実態については十分に分析がなされていない。

よって、本研究で保育科を専攻する学生を対象に保育実習前後の2時点において、保育をとらえる視点の変容と共に、保育実習中の「ふり返し」の実態について分析を行うことは、従来の成果に対する新たな知見を与えるものになると考える。

II. 方法

1. 調査対象

H県内の保育者養成課程があるH大学とY大学の2校において調査を実施した。

1) H大学について

H大学は、2年制の短期大学で1年次に保育実習が組み込まれている。よって、H大学では1年次の学生に対して保育実習前後の2時点において質問紙調査を行った。

2) Y大学について

Y大学は、保育者の養成課程として2年制と4年制の2種類のコースがあり、それぞれ2年次と4年次に保育実習が組み込まれている。よって、H大学においては、2年制及び4年制のコースのそれぞれの学生に対して保育実習前後の2時点において質問紙調査を行った。

2. 調査の手続き

1) H大学における調査手続きについて

H大学では、保育実習が6月に組み込まれており、実習前の調査を平成19年5月に、実習後の調査を同年7月に行った。質問紙は実習前、実習後それぞれ53名の学生に配布しすべての学生から回答が得られた。また有効回答数は53で回収率は100%であった。

2) Y大学における調査手続きについて

Y大学では、保育実習が2年制、4年制共に6月に組み込まれており、実習前の調査を平成19年5月に、実習後の調査を同年7月に行った。

2年制の学生に対しては、実習前127名に質問紙を配布し、すべての学生から回答が得られた。有効回答数は127で回収率は100%であった。また実習後においては、145名の学生に質問紙を配布し、すべての学生から回答が得られた。有効回答数は145で回収率は100%であった。

続いて4年制の学生に対しては、実習前114名に質問紙を配布し、すべての学生から回答が得られた。有効回答数は114で回収率は100%であった。また実習後においては、66名の学生に質問紙を配布し、すべての学生から回答が得られた。有効回答数は66で回収率は100%であった。

3. 調査内容

質問紙は以下に挙げる3つの観点から構成されている。

- ① 実践をとらえる視点について
- ② 保育実習中における「ふり返し」の実態について
- ③ 保育実習前後での意識の変容について

本調査では保育実習の前後2時点において2回の質問紙調査を行った。実習前の質問紙では①の観点に関して、また実習後には①の観点と共に、②及び③の観点を加え質問紙を作成した。

①実践をとらえる視点に関する観点では、どのように実践をとらえるかについて回答者に保育の実践事例を読んでもらった後に、それについて考えたことを選択式で回答を求めた。続いて、②保育実習中における「ふり返し」の実態に関する観点では、実習中どのような機会に実践を「ふり返った」かについて、また実践中に生じる「ふり返し」についてどのような意識をもったかについて選択式で回答を求めた。最後に、③保育実習前後での意識の変容に関する観点では、保育実習前後でどのような意識の変容があったかについて選択式で回答を求めた。

尚、①の観点においては、実習の前後共に質問紙に回答した学生を分析対象とした。また、②と③の観点についてはY大学における4年制学生への調査後に質問紙に加えた経緯があり、4年制学生においては①のみの観点から分析を行うこととする。

III. 結果

1. 実践をとらえる視点について

保育実習の前後で実践をとらえる視点はどのように変

容するのか。本研究では、実践中に生起する「あまり気にならないような場面」と「気になりそうな場面」の事例における学生の意識の変容について分析を行った。具体的な方法としては、「あまり気にならないような場面」と「気になりそうな場面」における実践事例を学生に読んでもらった後、その場面が「気になる」か「気にならない」かの2件法での回答を求めた。

また、実践事例は、調査者が現役の保育者に対して行った半構造化インタビューを基に作成した。以下に作成したそれぞれの実践事例を提示する。

事例1 あまり気にならないような場面

帰りの時間、保育者(あなた)は子どもたちに、絵本を読むことにしました。保育者が、子どもたちの前に座り、絵本を読み始めました。子どもたちの反応はというと、はじめはざわついた雰囲気だったのが、絵本を読み進めていくにしたがって、子どもたちは落ち着き、物語の中盤にさしかかる頃には、子どもたちの姿勢は前のめりになり、物語の中に入り込んでいます。そして、絵本を読み終わると、子どもたちから、「先生もう一回よんで」、「面白かった」というような言葉を聞くことができました。

事例2 気になりそうな場面

T君は大好きなブロックで、新幹線を作っていました。「愛媛行きで一す！」T君の大きな声が教室中に響きわたっています。そのとなりでは、N君が同じくブロックで船を作っています。しかし、最後の船首の部分に到達した時、何と！！ブロックが足りなくなりました。N君は辺りを見渡すとそこにはT君の新幹線が…。N君は、こっそりと、T君のブロックを取りました。それに気づいたT君、言葉よりも先に、N君の頭を強く握り締めた拳でたたいたのです。N君は泣き出しました。

T君は、日ごろから言葉よりも先に手が出てしまうのです。

1) H大学1年生

i. あまり気にならない場面について

実習前後の調査結果を比較すると、実習後の方が「気にならない」場面であるにとらえた学生が若干多くなったことがうかがえる(図1)。

また、実習の前後の数値の変化を確かめるため、5%水準で片側のt検定を行った。この結果、実習前後の数値の差は有意ではなかった($t(42)=1.68, n. s.$)。以上をふまえると、「あまり気にならないような場面」に関して、実践をとらえる視点においてあまり変容が生じなかったことが理解できる。

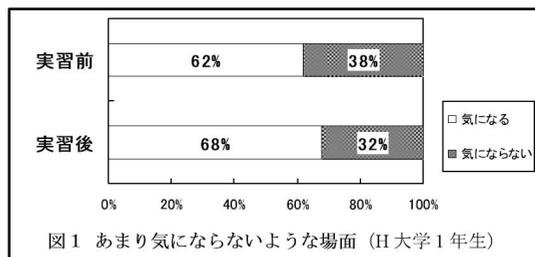


図1 あまり気にならないような場面 (H大学1年生)

ii. 気になりそうな場面について

実習前後の調査結果を比較すると、実習前の方が「気になる」場面であるにとらえた学生が若干多かったことがうかがえる(図2)。

また、実習の前後の数値の変化を確かめるため、5%水準で片側のt検定を行った。この結果、実習前後の数値の差は有意ではなかった($t(42)=1.68, n. s.$)。以上をふまえると、「気になりそうな場面」に関して、実践をとらえる視点においてあまり変容が生じなかったことが理解できる。

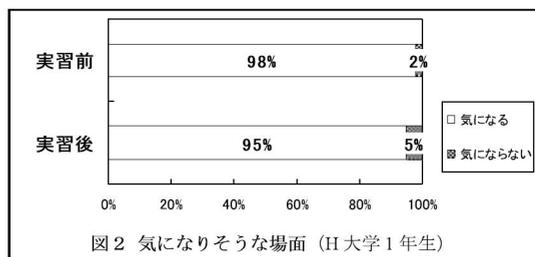


図2 気になりそうな場面 (H大学1年生)

2) Y大学2年生

i. あまり気にならない場面について

実習前後の調査結果を比較すると、実習後の方が「気にならない」場面であるにとらえた学生が多くなったことがうかがえる(図3)。

また、実習の前後の数値の変化を確かめるため、5%水準で片側のt検定を行った。この結果、実習前後の数値の間に有意な差が示された($t(119)=1.66, P<.05$)。以上をふまえると、「あまり気にならないような場面」に関して、実践をとらえる視点において変容が生じたことが理解できる。

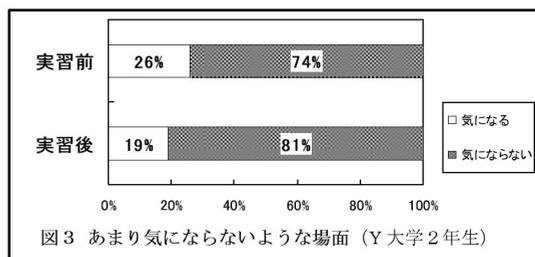
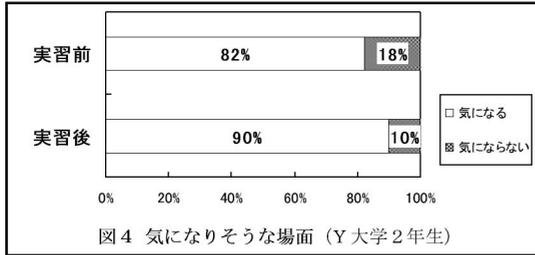


図3 あまり気にならないような場面 (Y大学2年生)

ii. 気になりそうな場面について

実習前後の調査結果を比較すると、実習後の方が「気になる」場面であるととらえた学生が多くなったことがうかがえる(図4)。

また、実習の前後の数値の変化を確かめるため、5%水準で片側のt検定を行った。この結果、実習前後の数値の間に有意な差が示された($t(119)=1.66, P<.05$)。以上をふまえると、「気になりそうな場面」に関して、実践をとらえる視点において変容が生じたことが理解できる。

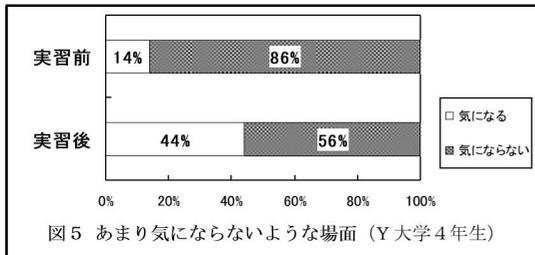


3) Y大学4年生

i. あまり気にならない場面について

実習前後の調査結果を比較すると、実習後の方が「気になる」場面であるととらえた学生が多くなったことがうかがえる(図5)。

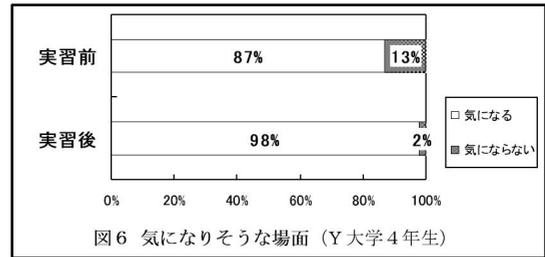
また、実習の前後の数値の変化を確かめるため、5%水準で片側のt検定を行った。この結果、実習前後の数値の間に有意な差が示された($t(61)=1.67, P<.001$)。以上をふまえると、「あまり気にならないような場面」に関して、実践をとらえる視点において変容が生じたことが理解できる。



ii. 気になりそうな場面について

実習前後の調査結果を比較すると、実習後の方が「気になる」場面であるととらえた学生が多くなったことがうかがえる(図6)。

また、実習の前後の数値の変化を確かめるため、5%水準で片側のt検定を行った。この結果、実習前後の数値の間に有意な差が示された($t(61)=1.66, P<.001$)。以上をふまえると、「気になりそうな場面」に関して、実践をとらえる視点において変容が生じたことが理解できる。



4) 考察

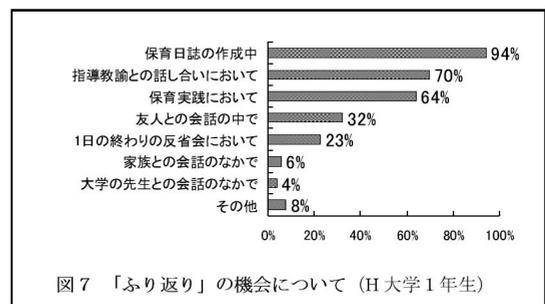
全体の結果を見返してみると、H大学1年生の学生においては実習前後で、「あまり気にならないような場面」と「気になりそうな場面」において実践をとらえる視点に変容はあまり見られなかった。一方で、Y大学2年生及びY大学4年生においては、それぞれの場面で実習前後の数値の間に有意な差が生じた結果となり、保育実習が実践をとらえる視点の変容に寄与したことが考えられる。

2. 保育実習中における「ふり返り」の実態について

実習中、学生はどのような機会に実践の「ふり返り」を行っていたのか。保育実習中に「ふり返り」を行った機会上位3項目を選択してもらい、項目ごとに選択された割合を示した。尚、今回の項目は前述した事例作成と同様に、調査者が現役の保育者に対して行った半構造化インタビューを基に作成した。

1) H大学1年生の結果

H大学1年生の結果を以下に示す(図7)。

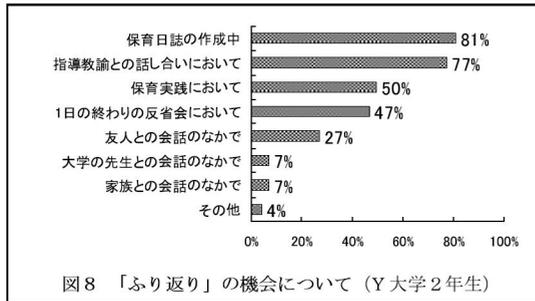


「ふり返り」を行う機会として最も多く選択されたのは、「保育日誌の作成中」で全体の94%の回答者が選択していた。次に多く選択された項目は、「指導教諭との話し合いにおいて」で全体の70%の回答者が選択し、続いて「保育実践において」が全体の64%の回答者が選択した結果となった。以上に示した項目が「ふり返り」の機会として選択された上位3項目であり、それぞれ半数以上の回答者

が選択していた。また、「その他」の機会として「帰宅中」と「お風呂の中」という内容が挙げられた。

2) Y大学2年生の結果

Y大学2年生の結果を以下に示す(図8)。



「振り返り」を行う機会として最も多く選択されたのは、「保育日誌の作成中」で全体の81%の回答者が選択していた。次に多く選択された項目は、「指導教諭との話し合いにおいて」で全体の77%の回答者が選択し、続いて「保育実践において」が全体の50%の回答者が選択した結果となった。以上に示した項目が「振り返り」の機会として選択された上位3項目であり、それぞれ半数以上の回答者が選択していた。また、「その他」の機会として「子どもが午睡しているとき」と「帰宅中」という内容が挙げられた。

3) 考察

H大学1年生、Y大学2年生の結果を比較すると、上位3項目において違いは見られなかった。中でも「保育日誌の作成中」の項目は、両者とも8割以上の回答者が選択しており、実習中の「記録物の作成」が、学生の「振り返り」に寄与していたことがうかがえる。また「指導教諭との話し合いにおいて」の項目が両者とも2番目に多く選択されており、保育の実践現場における他者との関わりも学生の「振り返り」に寄与していたことが理解できる。

3. 保育実習前後での意識の変容について

1) 「振り返り」における意識及び変容について

i. 「振り返り」における意識について

『実習を通して自分の保育を「振り返る」ことは大切だと感じたか』と選択式で尋ねた。その結果、すべての学生から「実感した」と回答が得られ、保育実習を通して、「振り返り」の重要性を認識している姿が示された。

ii. 「振り返り」の幅のとらえかたについて

『実習中、自分の保育における「振り返り」の幅を広げる必要性を感じたか』と選択式で尋ねた。その結果、H大学1年生では全体の98%の学生が、Y大学2年生では96%の学生が、実習中に「振り返り」の幅を広げる必要があると実感していたことが示され、実習中に「振り返り」の重要性とともに、「振り返り」において視野を広げて保育をとらえることの必要性を認識していることが示された。

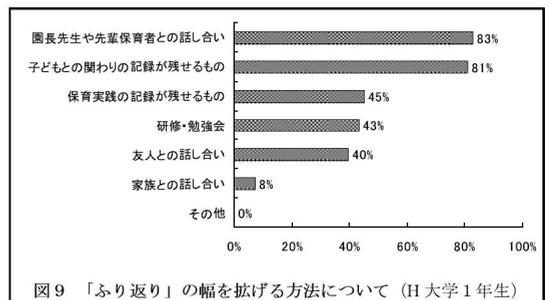
2) 「振り返り」の幅を広げる方法について

学生は保育実習を通してどのようなものが自分の保育における「振り返り」の幅を広げられるものになると感じたのか。回答者に『保育者となったときに、どのような方法があれば、自分の保育における「振り返り」の幅を広げられものになるか』と尋ね、該当する上位3項目を選択してもらい、項目ごとに選択された割合を示した。

i. H大学1年生の結果

H大学1年生の結果を以下に示す(図9)。「振り返り」の幅を広げる方法として最も多くの回答者が選択していたのは、「園長先生や先輩保育者との話し合い」で全体の83%の回答者が選択していた。次に多く選択されていたのは、「子どもとの関わりの記録が残せるもの」で全体の81%の回答者が選択しており、この2つの項目に選択が集まっていることが理解できる。

このように、H大学1年生においては、「振り返り」の幅を広げられる方法として、「実践現場における他の保育者との関わり」と「子どもとの関わりにおける記録物」という2つの方法を保育実習を通して強く認識していたことが示された。

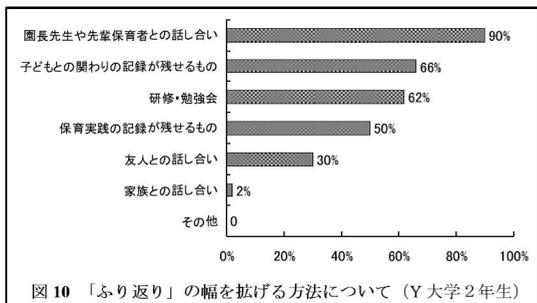


ii. Y大学2年生の結果

Y大学2年生の結果を以下に示す(図10)。「振り返り」の幅を広げられる方法として最も多くの回答者が選択していたのは、「園長先生や先輩保育者との話し合い」で全

体の 90%の回答者が選択しており、他の項目と比べると突出して高い数値を示していることが理解できる。次に多く選択されていたのは、「子どもとの関わりの記録が残せるもの」で全体の 66%の回答者が選択していた。また、上位 4 項目はそれぞれ半数以上の回答者が選択しており、選択の幅において広がりが見られた。

このように、Y 大学 2 年生においては、「ふり返り」の幅を拡げられる方法として「実践現場における他の保育者との関わり」と「保育に関する記録物」という 2 つの方法を保育実習を通して認識したことが示された。

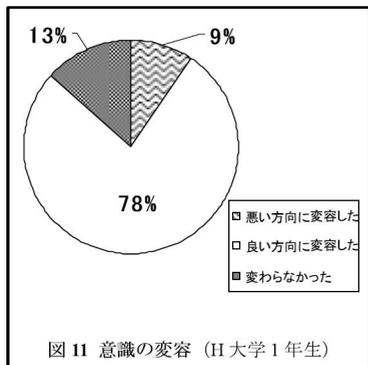


2) 保育実習前後における意識の変容について

『実習前に幼稚園・保育所に対してもっていた意識が実習に行くことで変容したか』と尋ね、「悪い方向に変容した」、「良い方向に変容した」、「変容しなかった」の 3 件法で回答を求めた。

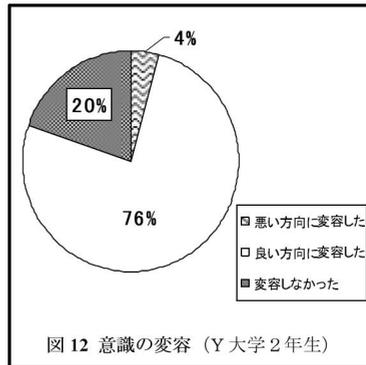
i. H 大学 1 年生の結果

H 大学 1 年生の結果を以下に示す (図 11)。その結果、最も多く選択されたのは、「良い方向に変容した」の項目で全体の 78%の回答者が選択していた。続いて、「変容しなかった」の項目が全体の 13%、そして「悪い方向に変容した」の項目が全体の 9%の回答者が選択した結果となった。



ii. Y 大学 2 年生の結果

Y 大学 2 年生の結果を以下に示す (図 12)。その結果、最も多く選択されたのは、「良い方向に変容した」の項目で全体の 76%の回答者が選択していた。続いて、「変容しなかった」の項目が全体の 20%、そして「悪い方向に変容した」の項目が全体の 4%の回答者が選択した結果となった。



iii. 考察

調査の結果、H 大学 1 年、Y 大学 2 年共に 7 割以上の学生が「良い方向に変容した」と回答していることが示された。さらに、「悪い方向に変容した」と選択した回答者も含めると、全体の 8 割以上の回答者が実習の前後で保育に対する意識に変容があったことが示された。

以上をふまえると、保育実習を契機として保育に対する意識の変容がほとんどの学生の中で生じたことが理解できる。

3) 具体的な変容点について

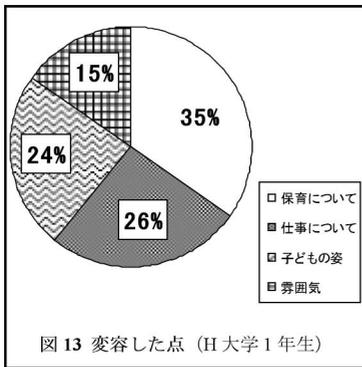
「悪い方向に変容した」と「良い方向に変容した」と回答した学生に対して、どのような点で変容したのかについて以下の 5 つの選択肢の中から回答を求めた。

1. 幼稚園・保育所の雰囲気について
2. 子どもの姿について
3. 保育者としての仕事のやりがいや、仕事の忙しさについて
4. 保育の難しさや楽しさについて
5. その他

i. H 大学 1 年生の結果

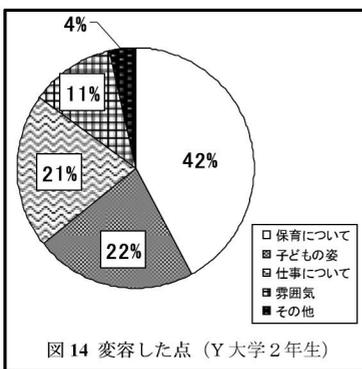
H 大学 1 年生の結果を以下に示す (図 13)。その結果、最も多くの回答者が選択していたのは、「保育の難しさや楽しさについて」の項目で、全体の 35%の回答者が選択していた。続いて、「保育者としての仕事のやりがいや、

仕事の忙しさについて」の項目が全体の26%、「子どもの姿」の項目が24%となっており、この3項目において全体の8割以上の回答者が選択した結果となった。



ii. Y大学2年生の結果

Y大学2年生の結果を以下に示す(図14)。その結果、最も多くの回答者が選択していたのは、「保育の難しさや楽しさについて」の項目で、全体の42%の回答者が選択していた。続いて、「子どもの姿」の項目が全体の22%、「保育者としての仕事のやりがいや、仕事の忙しさについて」の項目が21%となっており、この3項目において全体の8割以上の回答者が選択した結果となった。また、「その他」の項目においては、「思い描いていた保育者の姿と実際の保育者の姿は異なっていた」と「保育者の仕事の裏を知ったような気がした」という内容が挙げられていた。



iii. 考察

H大学1年生、Y大学2年生共に、保育実習を通して「保育の難しさや楽しさについて」が最も多くの回答者が選択した項目となり、両学年の結果に大きな差異は見られなかった。さらに、両学年共に「幼稚園・保育所の雰囲気につ

いて」の項目を選択した回答者が少なかったことをふまえると、保育実習前に実施される観察実習などで、幼稚園・保育所の雰囲気についてはある程度認識しており、この点が影響し選択者数が少なくなったことが推測される。しかし、実践については、外側から保育をとらえる観察実習では十分に把握しきれず、保育実習において内側から保育をとらえることにより両者の意識の間に差異が生じ、今回の結果につながったものと考えられる。

IV. 総合考察

1) 保育実習前後における保育をとらえる意識の変容

本調査では、保育中に生起する「気になりそうな場面」と「あまり気にならないような場面」をとらえる視点の変容について分析を行った。その結果、学年が高くなるにつれ保育をとらえる視点の変容が大きくなることが示された。この点をふまえると、保育実習における保育をとらえる視点の変容に寄与する要因の1つとして、保育実習前の学校での修学時間が考えられる。つまり、保育実習前に修得される知識と、保育実習で獲得される知識との間に差異が生起し、その差異の大きさの違いが今回の結果をもたらしたものと考えられる。

以上をふまえると、保育者養成カリキュラムにおける保育実習の位置づけが学生の保育をとらえる視点の変容に影響を与えたと言えるだろう。また、保育実習が新たな発見が得られる場となるためにも、保育実習前に修得した知識と、保育実習中に修得する知識との間に差異が生起するように保育実習を設定することが重要であると考えられる。

2) 保育実習中の「ふり返し」の実態

保育実習中に生起する「ふり返し」について、「保育日誌の作成中」と「指導教諭との話し合い」の際に生起する頻度が高いことが示された。この点をふまえると、学生の「ふり返し」を誘発させるような保育日誌の使用と、指導教諭の学生への言葉かけという2点が学生の「ふり返し」に寄与するものになると言えるだろう。またこの点については、「ふり返し」の幅を拡げる方法について「園長先生や先輩保育者との話し合い」と「子どもとの関わりの記録が残せるもの」の項目を多くの回答者が選択していたことから理解できる。

以上をふまえると、保育実習中に生起する「ふり返し」に寄与する要素として、「記録物の作成」と「保育者との話し合い」という2点が挙げられる。また、保育実習前後の意識の変容に関する結果をふまえると、記録物によって学生自身が保育における「楽しさ」や「難しさ」を認識し、それについて指導教諭と話し合うことで、理解を深めたり、悩みや課題を解消できるような形態が望ましいと考える。

3) 今後の展望

本研究は保育科専攻の学生を対象に保育実習前後の2時点において、保育をとらえる視点の変容及び、「ふり返り」の実態について考察を行い、以下の2点においてその意義が見出せたと思われる。第一に、修学年数の異なる学生を対象に分析を行ったこと。第二に、保育実習中の「ふり返り」について学生の意識を基に分析を行ったことが挙げられる。本研究の結果から、修学年数により保育実習前後に生起する保育をとらえる視点の変容の大きさが異なること、また、保育実習中の学生の「ふり返り」には「保育者との話し合い」と「記録物の作成」が寄与していることが示された。

今後は、本研究で得られた結果を基に、学生の「ふり返り」に寄与する記録物の検討、及び、それを使用した指導教諭との話し合いの形態について考察を行っていかうと考えている。

引用・参考文献

- 榎藤桂子・大井直子(1998) 保育者志望者の子ども観 日本発達心理学会第9回大会発表論文集 304頁
- 生田目喜兵衛(1973) 保育実習から学んだもの：保育日誌から 茨城女子短期大学紀要 2号 7-17頁
- 伊藤智里・小河晶子・樟本千里・岡田恵子(2006) 保育所実習前後の就業自己イメージの変容 川崎医療短期大学紀要 26号 113-116頁
- 小山祥子(2007) 幼児理解と保育者の援助理解を深める保育記録に関する研究(II)：エピソード記録型実習日誌の効用と課題 北陸学院短期大学紀要 39号 45-58
- 松永しのぶ・坪井寿子・田中菜緒子・伊藤嘉奈子(2002) 保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響 鎌倉女子大学紀要 9号 23-33頁
- 武石仁美(2000) 幼児理解への意識の変容：実習前後のアンケート調査からの検討 日本保育学会大会発表論文抄録 53号 914-915頁
- 戸田まり・大滝まり子・佐藤信雄(2000) 保育実習による学生の子どもイメージの変化 日本発達心理学会 第11回大会発表論文集 137頁

謝辞

本研究を進めるにあたり、質問紙調査にご協力いただきました多くの学生の皆様に感謝申し上げます。